

# 談話分析から見た異文化間コミュニケーション

——日本人の言語行動を中心に——

齋藤みちる・徐愛紅・多田美有紀・大浜るい子

## 1 はじめに

異文化間のコミュニケーションには、様々なギャップが生じる。互いの言葉が十分でないときは言うに及ばず、表面的には言葉の問題が見あたらない場合にも起こりうる。むしろ、問題はこちらの方が大きいかもしれない。生駒・志村(1993)は、発音や文法上の誤りとは違い、表面にははっきりと見えない分、場合によっては学習者の人格上の欠点とみなされることがあると指摘し、このようなギャップは、主に、母語における語用論上の規則を、学習言語の使用時にも適用してしまうプラグマティック・トランスファーに起因していると考えている。円滑なコミュニケーションができるようになるには、狭義の言語学習のみならず、その言語社会の行動規範やその方略に習熟する必要があるのである。近年、中間言語語用論と呼ばれる、学習者と母語話者の発話行為レベルでの比較対照研究が盛んで、誤解が生じる原因の解明が進められている。また談話分析の領域でも、談話の展開構造や対話者間の役割交替の仕組みなどが明らかにされつつあり、異文化間の比較もなされている。それらの成果は、当該言語の学習者、特に上級レベルに達しながらもコミュニケーション上のトラブルに悩む外国人学習者にとって大いに役に立つものであろう。しかし、それは単に外国人にとってだけではなく、むしろ母語話者にとっても役立つものであるはずである。プラグマティック・トランスファーといえは、間違い、誤りと理解されそうであるが、異文化間のこの種のギャップというのは、本当の意味での間違いや誤りではない。言ってみれば人間相互のやりとりにはつきものの齟齬やすれ違いである。一方が他方に合わせるということで解決すべきものではなく、互いに相手のやり方に理解を示しながら、自分のやり方も認めてもらうという性格のものであろう。そうだとすれば、単に学習者のみならず、母語話者自身も自分のやり方に通じ、自分がどのような規範が支配する社会に属し、その社会では規範維持のためにどのような方略が用意されているかを認識する必要がある。ただ、我々にはいまだ十分に我々自身の行動規範、いやそれ以前に行

動の仕方そのものすら明確になっていない。本考察は、そういう問題意識を持って、その解明を目的に見据えてなされたものではあるが、実際の事例の報告と個別的な分析以上のものにはなっていない。遠大な計画に参画するための、予備的試験的作業と位置づけている。

## 2 談話資料の概要

本考察は、日本人と外国人留学生との間で交わされた自然な談話の分析である。今回外国人との談話を選んだのは、日本人同士の談話では、あっても見落とされがちで行動上のルールが、外国人の異質なルールと出会うことによって、その違いが一層顕著に現れるだろうと考えたからである。留学生の出身地が中国、台湾、韓国と、アジアに偏り、また談話ごとに違ってもいるが、本考察は日本人に焦点を当てたものであり、留学生は非日本人という扱いをするにとどめているので、大きな問題ではなからう。分析に用いられた談話資料の概要は表1に示すとおりである。紙面の都合上談話全体の転写資料は省略するが、必要に応じ本文内に引用する。

## 3 分析と考察

本考察では4つの談話を取りあげる。談話1と談話2を仮に「目的志向的談話」と呼ぼう。それに対して談話3と談話4を「非目的志向的談話」と呼んでいく。

いかなる談話もそれなりに目的があろうが、ここで「目的志向的」というのは、道を尋ねたり、店屋でものを買ったりするときのように、談話自体がある目的に向かって組み立てられ、談話開始時に談話者達にその展開過程が知られているものを言う。その意味では、雑談にも親交を深めるなどの目的があるが、話自体がどんな方向へ進んでいくか分からないというのとは対照的である。談話1は自主運営の勉強会にどのような名前をつければいいのか、談話2はこれから見るビデオをどれにするか、をめぐって交わされた談話であり、どちらも、ある結論に至る

表1 談話資料の概要

談話番号	談話のタイプ	談話内容	談話参加者とその職業	談話時間	採録時と採録場所
談話 1	目的志向的 <sup>注1</sup>	自主運営の勉強会に名前を付けようという提案を受けての話し合い。色々な名前が挙がるが、なかなか全員の合意が得られない。	日本人(J1,J2,J3) 3名 台湾出身者(T1) 1名 韓国人(K1) 1名 いずれも大学院生	10分15秒	1995年11月 東広島市
談話 2	目的志向的	一緒にビデオを見るために集まった人たちの間で、どのビデオにするか話し合われたもの。	日本人(J4,J5,J6) 3名 中国人(C1) 1名 いずれも大学院生	9分40秒	1995年11月 東広島市
談話 3	非目的志向的	雑談。J7の学業、生活、趣味などが話題になった。	日本人(J7)1名、韓国人(K2)1名、中国人(C2)1名 いずれも大学院生	10分13秒	1995年11月 東広島市
談話 4	非目的志向的	J8の留学を聞きつけたJ9がお祝いの電話をかけたもの。	日本人(J8,J9) 2名 いずれも教員	4分53秒	1984年7月 松山市

注1) 3.分析と考察を参照

ための「話し合い」であり、典型的な目的志向的談話である。目的志向的談話にはそれぞれのタイプに固有の展開過程(図1参照)というものがあり、それはかなりの程度文化を越えたものなのかもしれない。

だから例えば、談話1は日本、台湾、韓国出身者による談話であるが、どの発言もおおむね「話し合い」の展開過程内の各ステップに対応している。すなわち、ほとんどすべての発言は「話題提出」「意見表明(ここでは名前の提案)」「賛成表明」「反対表明」「賛成反対の理由説明」のいずれかに該当していた。そういう意味では、異文化間のコミュニケーションでも、目的志向的談話では問題はさほど大きくなく、難しさはむしろ雑談のように、明確な展開過程を設定することができない「非目的志向的談話」にあるのかもしれない。そこでは談話に明確な目的がない分だけ、人間関係維持のために話される部分が多くなり、その実現のための方策が社会や文化で固有に発達しているのが衝突するからであろう。しかし、以下で見ると目的志向的談話においても全く問題がないわけではない。展開過程の存在がそ

れを見えにくくはしているが、非目的志向的談話で顕著になるのと同様の特徴が実は隠されているのである。

3-1では談話1を用いて展開推進への貢献という観点から、3-2では談話2を用いて物事を決定する際の振る舞い方という観点から、日本の社会に存在する行動規範を見つけ出すつもりである。そして3-3では、その規範が非目的志向的な談話においてどのように実現されるかを談話4で確認した後、外国人との談話においていかに違った様相を呈するかを談話3で示したいと思う。

### 3-1

談話1(勉強会の名前つけ)では、どの発言もおおむね「話し合いの展開過程」内の各ステップに対応し、話し合いはスムーズに進んでいる。しかし、日本人と外国人の発言はステップ上の偏りがあり、談話内での役割が分かれているように思える。最も顕著なのは、提案部分のステップに日本人が現れないということである。計10回の提案がおこなわれているが、日本人によるものはそのうち2回である

(表2参照)。日本人が3名いたこと、そして談話中にとったターンの回数に比べると、その違いは明確である。

しかし、これは日本人達が名前を付けることに興味が高かったことを意味するのではない。そもそも名前を付けようと言い出したのはJ1であ

図1 話し合いの展開過程

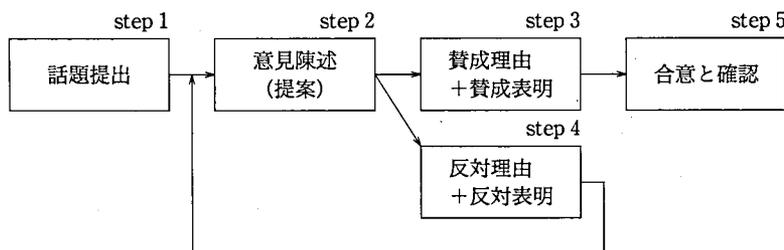


表2 談話参加者別のターン回数と提案回数

談話参加者	ターンの回数	提案回数
J1	31	2
J2	15	0
J3	17	0
K1	24	5
T1	11	3

り、J1自身も2回の提案をしている。またJ2、J3にしても「仲間を増やしやすような、みんな誰でも来られるような」の考えなければならないと言い、「表の会長、裏の会長」を置き「幹事長」も必要だと半ば冗談の形で場を盛り上げているのを見ると、単に無関心であったとは言い切れない。では、日本人達は、名前の提案をせずに、なにをしていたのかといえば、最も多いのが提案に対する意見や感想を述べるというものである。そしてそのほとんどが提案に反対する内容のものである。

- 「ちょっと合わない気がする」(J1)
- 「妖怪人間ベラじゃないんだから」(J3)
- 「それはがらじゃないよ」(J2)
- 「ちょっとミーハーっぽいじゃない」(J3)
- 「なんか人生のなんか、晩期に迫られたみたい」(J1)
- 「あまりストレートすぎて」(J3)

すなわち、そこには2人の外国人が次々に提案をし、3人の日本人が自分では代替案を出さずに、「その提案を支持しない」という趣旨の発言を繰り返すという構図が見受けられるのである。外国人のK1とT1も他者の提案に対して感想を述べることはあるが、その際「面白いじゃない、面白い」(T1)、「人が聞いてああ一生懸命やってるなあというイメージいいのよ」(K1)など、むしろ積極的に支持する発言をしている。また賛成でない場合には、その改良案を提出したり(1)、あるいはその提案については何もいわずに新しい別の提案をしている(2)。

- (1) (K1のよるびと(夜人)会という提案に対して日本人がためらっていると)「ね、よびとは？」とT1。K1も「ちょっと短くしよう」と同意。
- (2) (T1の「ね、よやく、よやく、へへへ、夜

のまあ、デートのメンバー」には直接言及せず)「あ、あれはどう？ あのを、昔ね、蛍の、あのを明かりで勉強するとかあったんじゃない？」とK1。

これら日本人と留学生の行動の違いは何を意味しているのだろうか。図1の話し合いの展開過程に照らし合わせてみよう。外国人の貢献がステップ2と3で顕著であるというのは、談話がステップ5へ展開するのを準備する、あるいはステップ5へと促すものであり、いわば談話展開を推進する方向での貢献であることが分かる。それに対し、日本人のステップ4での貢献はステップ2へ移るための貢献であり、展開を阻止するあるいは停滞させるとまでは言えないが、少なくとも積極的に推進させるとは言えない行為であることが分かるだろう。

### 3-2

談話1のように、基本になる展開過程が存在し、本来そこから免れることのできない目的志向的談話では、日本人の行動が、各展開ステップを順次進みながら目的に到達するよう貢献することではなく、むしろステップに留まる、あるいは自分からは進まない様子を見てきた。しかし、同じ目的志向的談話でも、単に停滞し後退するだけではなく、展開過程そのものを逸脱することもある。次に見る談話2(ビデオ決め)がそれである。これは談話1とは違って、必ず談話展開の最終地点(=ビデオの決定)へ到達しなければならない。そうでなければ参加者達はビデオを見ることができなからである。その意味では最終決定を保留することが許される談話1の参加者達よりも、談話2の参加者達は目的に対して協力的であることが要求されているはずなのに、突然全く関係のない話を割り込ませて、展開の推進を妨げているかに見える日本人参加者がいるのである。以下に示すのは、J4が、何本かのビデオ名を挙げ、そのうちの1本の内容説明をしているところへ、いきなりJ5が出されていたお菓子の話をはじめた箇所である。

- J4: で、その人がアルバイトでクリスマスかなに
- J4: かに、こう、その、障害者だから そ、その
- J5: うん
- J4: 手伝うっていうアルバイトして、アルパチャー

J 4 : ノと 知り合うんね で、アルパチーノはす  
 J 5 : うん ああ

J 4 : ごく自分にもみんなにもすごくこう、嫌って  
 J 4 : いうか 人間が嫌いで すごく迷惑を  
 J 5 : ううん うん

J 4 : かけてるんだけど 何かね、だんだんね、  
 J 5 : うん

J 4 : こうお互いに交流を深めて 最後はなん  
 J 5 : ううん

J 4 : かこう、すごい感動する 最初はね、あん  
 J 5 : ああ

J 4 : まり面白くないかもしれん  
 J 5 : これおいしい

談話1の日本人達の場合と同じように、J5も決してビデオ決めに無関心であったわけではない。談話中の発言回数も少なくはなく(表3参照)、しかも「カリータの道はどう?」と自分から提案したり、他の提案には「あ、面白かった?」と興味を示し、見たかったジュラシックパークが却下されたときには「いつか見せてね」と言い、むしろ他の参加者達よりも大きな関心を持っているとさえ言える。おそらくJ5も、談話1の日本人同様、何らかの理由で「展開非推進的」に振る舞っているのであろう。ところでこのように振る舞うことにどのような意味が隠されているのだろうか。

少し丁寧にこの談話展開を見てみよう。表3は誰がどんな内容のことをいつ話したかを時間軸に沿って並べたものである。時間は左上から右下へと流れている。お菓子の話を別にすれば、談話は、どのビデオにするかという「問いかけ」、推薦する「ビデオ名」、その「内容説明」、そして面白いかどうかの「評価」、さらに見た人がいないかどうかの「未見確認」、そしてそのビデオを見たいかどうかの「態度表明」からなっている。

都合6本のビデオ名が挙がっているが、最終的に選ばれたビデオはSである。表を見ると、Sは評価、未見の確認が行われた唯一のビデオであることが分かる。そしてそれは談話展開のごく早い段階で完了していることも分かる。実はお菓子の話が挿入されたのは、この時である(\*でその箇所を示す)。J5には、その段階でビデオが決定されることが察知できたのではないだろうか。そして、それを阻止するための「お菓子の話」ではなかったのだろうか。ひとしきりお菓子の話をした後、J5は「決めよう

表3 時間軸に沿ってみた発話者と発話内容

問いかけ	ビデオ名	内容紹介	評価	未見確認	態度表明
J4	J4				
	J4				
	J4	J4	J4		
	J4(S)	J4	J4	C1	*
J5					
J4	J4	J4			
	J5		J4(-)	J4(-)	J5
J4	J4	J4	J4 J5 C1	C1(-)	
	J5		J4(?)		J5
	J4(S)				J5(?)
J4					J6(?)
J4J4					
J5J5	J5(S)				J6(?)
C1				J4	J4
J4		J4			J5J6

J 4, J 5, J 6, C 1 : 談話参加者(日本人Jと中国人C)  
 (-) : ビデオが選ばれるためにはマイナスに働く発言  
 (?) : 明言を避けた発言  
 (S) : 最終的に選ばれたビデオについて言及された箇所  
 \* : お菓子の話が挿入された箇所

決めよう」と軌道修正をし、別のビデオを推薦している。J5は別のビデオが見たいのである。しかしSに反対であれば、J5は評価や未見確認、あるいは態度表明のところで反論してもよいはずである。それが展開過程に忠実なやり方である。しかしJ5が選んだのは展開を振り出しに戻すという、展開過程に逆行したやり方である。なぜそのまま進めなかったのだろうか。評価、未見確認、特に態度表明へ進むとすれば、反対意見を言うことになるが、単にそれを避けたかったのか。いや、そうではないだろう。現に談話1では提案がなされるごとにためらうことなく反対してはいたではないか。J5が振り出しに戻したのは、言わなければならないのが反対意見であったからではなく、その相手がJ4だったからではないだろうか。J4は以下で見ると、この場面で特別な人間である。J5の行為は、対立すべきでない人間への直接的な対立を避けたものと解釈できるのではないだろうか。

談話1では、展開を推進させる外国人と停滞させる日本人という構図があったが、談話2のように中国人留学生C1があまり話さず、ほとんど日本人だけで談話が進んでいるような場合、誰が推進役を引

き受けるのだらう。談話2ではもっぱらJ4が主導しているが、これにはわけがある。談話が行われているのはJ4の部屋であり、他の参加者はそこにお邪魔をし、お菓子をだしてもらってまでなしを受けている立場である。またビデオもJ4所有のものである。この場面はJ4のテリトリー内なのである。

外国人に比べて、日本人の談話展開の仕方は目的に対して非推進的であった。言い換えればそれはイニシアティブをとらないようにする姿勢でもある。互いがとらないようにする中で、談話2のように参加者の関係が不平等な場合は、優位にある者にそれが委ねられていくのであろう。先にもふれたが、ビデオ決定にとって重要な評価や未見確認は優位者J4を別にすればC1のみで他の日本人は行おうとはしない(表3参照)。すなわち日本人達は優位者の意向に従う傾向があるのではないか。だからこそ、J5がJ4の推薦ビデオに賛同できないとき、全く無関係なお菓子の話を挟み、J4の推薦自体をなかったこととして装えるだけの時間を作り出す必要があったと言えないだろうか。

もちろん優位者も自分からイニシアティブをとるのではない。誰もがとらない中でとらされていく様子が、最後のビデオ決定の瞬間によく現れている。「どっちでもいい」と繰り返すJ5とJ6を前にしてJ4は4回も「どれにしよう」と問いかけなければならぬのである。そして最後は「見ようか」というJ4の問いかけにJ5とJ6は「うん」と賛意表明をし、全員で決まったことになるのである。面白いことにこの場面ではC1は、「J4ちゃん、決めて」と催促するだけで、形だけの合意プロセスに関わりたくはない(C1は賛意表明をしていない)。C1もJ4が決めることは分かっていたのである。

このように解釈してみると、談話1においても日本人同士の間で似たことが行われているのが見えてくる。二人の日本人は自分では何の提案もせずに他の提案に反対ばかりしていると述べたが、賛成意見を述べているところが一カ所ずつあるのである。

(J1が提案した「よるびと会」に対して)

- J1:なんかきれいなことない?  
J2:本当、きれいね、風流なね。

(K1が提案した「鈍会」に対して)

- J1:あ、鈍会にしよう、鈍  
J3:あ、それはいいですね。

つまりJ2、J3の二人は外国人達の提案には反対しながら、J1の意見には従おうとするのである。談話1は談話2とは異なり、大学内の一室という公共の場で、同じ勉強会の仲間という対等な関係で行われた談話である。しかし、J1はJ2、J3にとっては先輩にあたり年齢も数才年長である。談話をさらに丁寧に見ると、J2、J3が行う不賛成の意見の直前にも必ずJ1の不賛成であるという態度を見ることができると言える。

(T1の提案に対して)

- J1:よびと会、なんかちょっと合わない気がする  
J3:なんかなんか妖怪人間ベラじゃないんだから

(K1の提案に対して)

- J1:ん、ん  
J2:それはがらじゃないよ

このように見てくると、日本人は単に自ら新しいステップに移ろうとしないだけでなく、優位者の意向を尊重し、展開の方向性までも委ねていることが分かる。

すなわち日本人の談話展開には、なるべく自らはイニシアティブを取らずに、優位者にその役をまかせ、しかも優位者からの明確な意見がでるまで決定を保留し、その意見に従うという形で合意に達しようとする姿勢が伺えるであろう。

談話2にはこの他にも、談話展開非推進的と理解できる現象が見られる。ひとつは主にJ4が行う評価の仕方である。「最後はなんかこう、すごい感動する。最初はね、あんまり面白くないかもしれん」のようにプラスの評価とマイナスの評価を同じ一つのターンの中で行うのである。評価がどちらかに決まれば、談話は次の段階へ進むことができる。しかしこのように評価をオープンにしておく限り談話はその段階に留まることになる。談話展開を推進させない一つの方策ではないかと思われる。

もう一つ気になるのは、どのビデオにしようかという問いかけをJ4とJ5のみがすることである。ビデオを推薦するのもJ4とJ5のみである。言ってみれば問いかけと答を同一人物がすることになっている。そしてよくよく観察するとJ4はビデオ名を挙げる前に必ず「何にしようか」「何がいい」「どっちがいい」と言っている。まるで枕詞のように。こ

れも談話展開を遅らせるための方策と考えることはできないだろうか。既に推薦段階にいる話者がその前の問いかけ段階から話をはじめているからである。

### 3-3

以上は目的志向的談話において日本人がとった行動について見てきた。目的が明確な場合、日本人達は自らが積極的にイニシアティブをとり談話展開を推進することはせず、上位者の主導の元に緩やかに最終地点へ向かおうとしていた。では、明確な目的がない談話、すなわち談話展開のプロセスがあらかじめ想定できない談話ではどのように展開するのだろうか。ここに日本人同士の会話（談話4）と、日本人と外国人による会話（談話3）がある。どちらも問いかけとそれへの応答という形で進んではいくが、二つの展開の仕方はあまりにも違う。前者の日本人たちは問いかけと応答の役割を交互に引き受けているのに対し、後者は外国人と日本人でそれぞれの役割を分担してしまっている。さらに顕著な違いは、応答時の情報量である。日本人同士の場合は、ひとつの質問に複数の情報が提供されるのに対し、外国人とのやりとりでは一問一答形式になっている。例を見よう。以下に示すのは、日本人同士の談話での問いかけと応答の様子である。これを見ると、問いかけ役と応答役とは言うものの、どちらかと言えばむしろ聞き手役と話し手役と言った方が適当であるような振る舞い方である。

< J9 が問いかけ役を引き受け J8 が応答役を引き受けている箇所 > (---: 問いかけ、<---: 応答を表す)

J9: 先生こないだ私ちょっと知り合いから あ  
 J8: ええ  
 J9: のお聞きしたんですが、ドイツ行かれるとい  
 J9: うことで ああほうですか  
 J8: ええ ええ、あの8月  
 J9: ええ ああそ  
 J8: のね あの3日に立とうかな思うて  
 J9: うですか それはおめでとうございます  
 J8: ええ  
 J9: すごいですねえ ええ  
 J8: いやいや、あの学校がね  
 J9: ええ えええ  
 J8: あの 援助してくれるんですよ そい

J9: すごいですねえ  
 J8: でねもう初めてだしねもう 1年間  
 J9: ええ あらまああ  
 J8: だけね 行けるんですよ

< J8 が問いかけ役を引き受け J9 が応答役を引き受けている箇所 >

J8: 私がまだね、あの住所が未定なんですよ  
 J9: あ、  
 J8: え  
 J9: ええええ、向こうへ行かれてから探される  
 J8: えあの 今ちょっとあたりはしてるんですけど  
 J8: どね まだ確実じゃないもんですからね  
 J9: はいはい  
 J8: もう  
 J9: 普通そうみたいです よ そういう方がほと  
 J9: んどで、私みたいに最初から住所が決まって  
 J8: あ、そうですか、あ、  
 J9: るなんて方が珍しいぐらいで はい  
 J8: そうですか え  
 J9: 私はもうたまたまそこにいた、いた方がね  
 J8: え  
 J9: あの紹介して下さったから、もう運が良か  
 J8: ああ  
 J9: った(・・)手間が省けたんですけど(・・)  
 J8: ええ  
 J9: 向こうへ着いてから 最初ひと月くらいはず  
 J8: ええ  
 J9: うっと回って 探されるみたいですよ  
 J8: ああそうですか  
 J9: その間あのペンションいうんです  
 J8: ええ ええ  
 J9: かね あの安いところでね あの過ごし  
 J8: ああなるほど  
 J9: れて そのうち身体も慣れてくる  
 J8: ええ ああ  
 J9: し、いうことで そういった調子ですねえ  
 J8: そうですか  
 J9: だから先生じっくりと あのもうね変なと  
 J8: そうですよね ええ  
 J9: ころへ入ると よく考えて 探  
 J8: ええ・・・  
 J9: されたらいいですよ

J 8もJ 9も一つの問いかけに対して多くのことを自分の方から述べているのが分かるだろう。「ドイツへ行くのか」という問いに対して「ええ」と肯定の答をした後、出発日、経済的裏付け、初回であること、留学期間について言及している。J 9も同じである。住所が未定であるというJ 8の話を受けると、それが普通であり、自分の場合は特別であると言い、さらに通常の場合の探し方と過ごし方、探す際のアドバイスを提供している。これら日本人達のやりとりの仕方を図示すれば次のように書き表すことができるだろう。

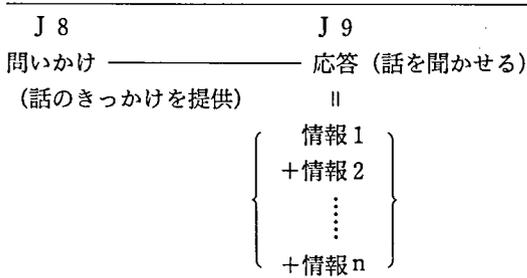


図2 日本人同士のやりとり

(J 8とJ 9は交互に役割を交替する)

これは、次の外国人達とのやりとりとは対照的である。

C 2 : い、いつからその、あの合気道に興味をもち  
 J 7 : 合気道は学部に入ってから  
 C 2 : 始めた ああ、大学  
 J 7 : うん  
 C 2 : に入ってから ああ、へえー、合気道すごー  
 J 7 : ふふふふ  
 C 2 : い あ、でも中国のカンフーと違うん  
 J 7 : うんうんうんうん カンフーって  
 C 2 : ですなえ、 ち、違いますなえ  
 J 7 : 攻撃でしょ? 攻撃だよな 合  
 C 2 : そうそうそう あああ  
 J 7 : 気道は守りだからね 守りの武道  
 C 2 : あ、でも女  
 J 7 : うんうんうん  
 C 2 : 性が習らっという方がいい  
 K 2 : 確かに じゃあ、  
 J 7 : いや、男の人が多い  
 K 2 : 女性の方が多い? 何でそれに  
 J 7 : 最初は、一番最初はあの、  
 K 2 : 興味をもち始めたの?

J 7 : 格好がかっこいい うん  
 C 2 : かっこいい  
 K 2 : じゃ、それは  
 J 7 : そうそう うん  
 K 2 : かっこいいって言うのは、男の人を見て  
 J 7 : んん うんっ てか、あの、  
 K 2 : 女の人でも? 服装?  
 J 7 : 柔道気に袴をはくんですけど、袴がかっこい  
 J 7 : い、で、武道、武道って何かかっこいいじゃ  
 J 7 : ないですか だから、あ、いいな、武道何か  
 K 2 : そう  
 J 7 : やろうと思ったけど、何か柔道とかは怖そう  
 J 7 : だったから、まあ、合気道は何か、何かよく  
 J 7 : 分からないけど、合気道いいかなって思っ

やりとりの仕方を図2に習って図式化すれば次のようになろう。応答には必ず問いかけが先行している。図2が聞き手と話し手という役割になっていたのとは対照的に、ここでは質問者と回答者という役割関係が維持されていることが分かる。

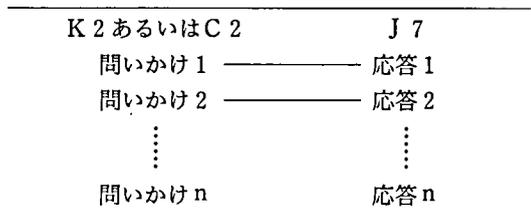


図3 日本人と留学生の間のやりとり

一体どうしてこの外国人達はこんなに問いばかり発するのだろうか。まるで試験官のようだとはこの談話を横で聞いていた日本人の感想である。しかし、ここで二つのやり方を合わせ眺めていると、K 2とC 2が問いばかりしなければならなかった理由が見えてくる。もし日本人のやり方が図2に示すようなものであれば、談話3の日本人J 7も同様に振る舞おうとするはずである。そうであれば、J 7は問いかけに答えた後、ただちにC 2やK 2に問い返すことなど思いも寄らないであろう。もしC 2やK 2がもう少し長く沈黙していれば、J 7は自分からさらに合気道の話を発展させた後、必ずC 2やK 2に問いを向けたのではないだろうか。そうすれば彼らが問いばかり発することにはならなかったと思われる。一方C 2やK 2が、談話というの問いと答のペアの連鎖によって成り立つものであると考えていれば、

今度はJ7から問い返しがあって、自分たちが答える番になるだろうと思っていたとしても、J7が質問をしなければ、再び自分が質問をしなければならぬ。談話を続けようとするれば、すなわち応答部分を生起させようとするれば、誰かが問いかけをする必要があるからである。J7がしなれば、自分たちがする以外にない。結果問いばかりを発することになったということではないだろうか。

談話中の役割の不均衡は以上のような事情から起こっていると思われるが、図2と図3では、基本的にテキストの構成という点で大きな違いがある。すなわち談話内での語られ方、あるいはテキストとしての作られ方が大きく異なっている。テキストの構成要素である情報を提供するの、どちらの場合も応答者であるが、テキスト作成にどのような情報がどのような順序で必要かを決めるのは、図2では応答者であり、図3では問いかけ者である。雑談は特別な展開過程のない談話である。言ってみれば何がどのように話されてもいい談話である。しかし少なくともあるまじきは要求される。テキストとしての結束性である。その責任を負うのが図2と図3では違っているのである。話し手主導と、聞き手主導の違いである。今、日本人のやり方が図2の「話し手主導」であり、留学生たちのやり方が図3の「聞き手主導」と言えば、一見これまでの主張と矛盾するように思えるかもしれない。イニシアティブを取らないようにする日本人の行動に「話し手主導」と言うのはそぐわないし、同様に自ら積極的に談話展開を推進させる留学生たちに「聞き手主導」と言うのも変に響くだろうからである。

しかし、我々の解釈は少し違う。問いかけには相手の行動を規制するという積極的な面があると言えないだろうか。相手の話を予め操作するという側面である。問いかけを、話し手から応答を引き出すための主導的な行為であると考えれば、留学生が度重なる問いかけをするのもうなずける。談話1において、外国人達は談話展開推進型であり、発話時点で要求されている展開ステップを自ら主導的に遂行していくことが協動的であると考えていることを示したが、雑談のように展開過程が想定されない談話においても、留学生たちは問いを発し、しかもそれを重ねることによって、そのつどの展開の方向性を規定し、談話相手をしかるべき発話行為へと導くというのは、まさに談話推進への主導的な貢献であるからである。この様に考えれば、日本人が一つの問い

かけに多くのことを答えるのは、相手に必要以上にイニシアティブを取らせないための方策であると言えないだろうか。いや、相手だけではなく、話し手と聞き手は相互に交替するのであるから、自分自身も相手に対してイニシアティブを取る回数が減るわけである。談話全体を通してみれば、図2であろうと図3であろうと、話し手が提供する情報量は同じかもしれない。しかし同じ情報が提供される中で、聞き手が話し手をコントロールする回数を比べてみれば、図2ははるかに少ない。聞かれてもいないことを一方的に話すのは、相手の問いかけの負担を減らすためであるというのは、恐らく外国人には理解しにくい、あるいは誤解され易いことかもしれない。しかしこれは決して、自分のターンを確保するための方策などではない。時には問われたことしか答えない人というのもあるが、そんな時のいごちの悪さは、誰も体験したことがあると思う。それは相手に必要以上にイニシアティブをとらせてしまう、非協力的な振る舞いなのではないか。問いを発することは、相手の話をコントロールすることである。そんな機会をなるべく少なくしたのが日本的なやり方ではないだろうか。

#### 4 まとめ

以上、談話中での日本人と外国人との行動を比較しながら、日本人には談話展開の非推進性、消極性とも言える性質があることを見てきた。そして、おそらくそれは、自分からイニシアティブを取らないようにするためであろうと解釈した。それは同時に、談話参加者の中の上位者（年齢、テリトリーなどから見た）にイニシアティブを取らせることを意味し、上位者には展開上のイニシアティブのみならず、発言内容に関しても従っていく傾向のあることを観察した。これらは、話し合いのように談話展開が予め決まっている談話で顕著に現れるが、展開過程が決められていない談話内でも、そのように振る舞うための方策が講じられているというのが我々の主張である。一つの問いかけに多くのことを答えるやり方は、できるだけイニシアティブを取る回数を少なくするための方策ではないかと考えた。Watanabe (1993) は、グループ・ディスカッションの談話構造を日米比較する中で、日本人の談話の様々な特徴を明らかにしているが、そこではアメリカ人達が与えられた議題の討論へためらうことなく入っていき、

一度の発言で一つの意見を端的に提出するのに対し、日本人は前置きが長く、1人が賛成と反対の両意見を提出し、自分の意見を物語に仕立てて話す傾向があることを指摘している。加えて、アメリカ人の中では話す順番など問題にはならず、それぞれが自分から名乗りをあげて発言するのに対し、日本人のグループでは年長者の男性が場を取り仕切り、最終的には年少者から年長者へ、女から男への順に発言するというやり方が選ばれたことを報告している。つまり、日本人は他の参加者達の意向が明らかになるまでは自分の意見を明言することをせず、社会的な地位や年齢などから上位者を判断し、その人物の主導で談話を展開させることを暗黙の了解としているのである。また、話を物語に仕立てるということは、尋ねられていないことを次々につけ加えた談話4の日本人の話と通じるものがあるだろう。Watanabe (1993) はアメリカ人との比較を行なったのであるが、本考察ではアジアの国々の留学生との比較によって同じような結果を導き出したわけである。しかしこれは、たとえば日本人には主体性がない、自分の意見を持っていない、あるいは上位者には逆らえないなどと主張するものでは決してない。勉強会の名前を提案しなかった日本人達に自分の意見がないと考えるのであれば、次々に提案する外国人達も本当の自分の意見はどれなのと言わなければならないだろう。ここで明らかになったことはいわば行動上のスタイルの違いである。そこからただちに人間性や能力を結論づけるのは、単に早計に過ぎるだけではなく、むしろ間違っただけである。ただ、スタイルの違いとは言え、我々には場面に応じて自在にそれを変えるということができるようにはなっていないため、この種の間違いをしまいがちである。生駒・志村(1993)が言うように「人格上の欠点」と見てしまうことがあるのである。しかし、我々の談話分析はそういう間違いをしないようにするための作業であったことを忘れてはいけない。

## 参考文献

- Blown, P. and S. C. Levinson (1987) : Politeness Some universals in language usage. Cambridge: Cambridge Uni. Press.
- Coulmas, Florian (1981): "Poison to your Soul" Thanks and Apologies Contrastively Viewed. in: Florian, Coulmas(ed.) Conversational Routine. Mouton Publishers. 69-91.
- 斐岩ナオミ(1986): 「意志決定 - プロセスと表現に見られる“日本人らしさ”」『言語生活』415号 56-61.
- 生駒知子・志村昭彦(1993): 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー: 「断り」という発話行為について」『日本語教育』79号 41-52.
- 神尾昭雄(1990): 「情報の縄張り理論」大修館書店
- 川村よし子(1991): 「日本人の言語行動の特性」『日本語学』Vol.10 5月号 51-60.
- 小林祐子(1986): 「あいさつ行動の日米比較研究」『日本語学』Vol.5 12月号 65-75.
- Manes, Joan & Nessa Wolfon (1981): The Compliment Formula. in: Florian, Coulmas (ed.) Conversational Routine. Mouton. 115-132.
- 丸井一郎・大浜るい子(1983): 「暑熱の会議室あなただけはどうする - 相互行為のストラテジー」『愛媛大学教養部紀要』第XVI号 153-184.
- 田中典子(1987): 「連載コミュニケーションの現場 1-6」『月刊言語』Vol.16 No.8-13.
- 津田早苗(1994): 「談話分析とコミュニケーション」リーベル出版
- Watanabe, Suwako (1993): Cultural Differences in Framing: American and Japanese Group in Discussions. in: Deborah, Tannen (ed.) Framing in Discourse. Oxford Uni. Press. 176-209.
- 横山杉子(1993): 「日本語における「日本人の日本人に対する断り」と「日本人のアメリカ人に対する断り」の比較 - 社会言語学レベルでのフォーリナートーク」『日本語教育』81号 141-151.